

# あの時を生きて



▶野市小学校で教師をしていた時の写真(左から2番目が入野さん)

自分のほうへ向かって飛んできたこともありませぬ。  
敵機が来たときは、当時一緒に作業していた仲間と慌てて防空壕に入り震えながら息をひそめていました。結果として、自分は助かりましたが、飛行場周辺の住民で亡くなられた方もおられます。



▶炭焼きを行っている写真

## 戦争の渦中で

戦争が進むにつれ、さらに状況が深刻になりました。男性には徴兵令が出され、実の兄も兵士として戦地に向かいました。しかし兄は徴兵後、胸の病気を患ったため、除隊となり、帰ってきました。同じ集落の方で、兄と一緒に徴兵された方の中には、乗っていた軍艦を沈められ亡くなった方もいます。  
また、空襲による被害を避けるために、壁を黒塗りにし、節穴

に紙を詰めて、外に光が漏れないように対策していました。空襲警報が鳴った時には、すぐに光を消して物音を立てず、じっとしていました。当時は密室のため、暑く、ハエや蚊がたくさんいました。が、恐怖で感じる余裕がありませんでした。

## そして終戦へ

高知大空襲のあった昭和20年7月4日。当時住んでいた高台の家から高知市内に爆弾が落ちるのが見えました。爆弾がキラキラと、まるで火花のようでしたが、あの爆弾の下に人がいると思うとやり切れない思いがしました。  
戦争が激しくなるにつれ、学校にいた生徒たちも段々と縁故



▶ピアノを弾く入野さん(野市小学校当時)

## 人の命が一番大事

大正に生まれ、昭和の戦中戦後に生き、平成、令和と大きな激動の時代を生き抜いた入野さん。昔の写真を見ながら体験を振り返る姿に、どことなく今でも、かつて教師をされていた時の落ち着きや姿勢を感じます。  
最後に戦争を知らない次世代の人たちに伝えたいメッセージをお伺いすると、「一言だけ強く、人の命が一番大事」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。

戦後75年、悲惨な戦争を乗り越え、苦しい日々を過ごし、日本の再興を支えてこられた方々の言葉からは、お一人お一人の祈りや願いが深く伝わってきます。  
戦争体験を語る世代も高齢となり戦争当時の話を直接聞くことは少なくなってきました。今回は野市町の入野綾子さん(97歳)を訪ねて、戦時中の暮らしについてお話を伺うことができました。

広報編集委員 島村 立法

## 【激動の時代】

入野綾子さんは大正11年野市町佐古で生まれ、小学校の教師を戦中から戦後にかけ55歳まで勤められました。  
佐古の農家に育った活発な入野さんは小学校高等科に進学、その後、女子師範学校に進み、さらに、専攻科(音楽専攻)に進まれたそうです。

専攻科に入学した当時、入野さんは19歳、時代は戦争の真っただ中でした。一九三八年(昭和13年)に制定された国家総動員法に基づき、国民は国のために勤労奉仕を行いました。当時、国内の労働力不足で女性も電車の車掌からバスの運転手まであらゆる職種で仕事をしていた時代でした。

## 勤労奉仕

最初の仕事は、当時重要な燃料源だった炭を作る「炭焼き」でした。作業中、さすが体に入らないようなマスクを着用してました。マスクが真っ黒になるほど煙が上がって、労働環境は良いとは言えませんでした。が、当時の仲間と作業したことを今でも覚えています。

また、桑畑に入って桑の木の皮をはぎ、それで兵隊の防護服

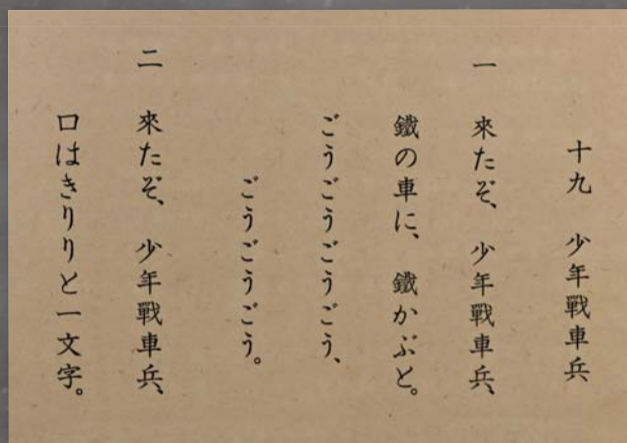
を作りました。作業を行っていた野市町はアメリカ軍に標的とされていた日章飛行場(現高知龍馬空港)に近いため、敵機が



終戦後GHQが日本に来てから教育の民主化が図られ、国家主義思想や戦意を鼓舞するような記述を墨で塗りつぶす活動が行われました。写真を比較すると、どういった内容が不適切と判断されたのかが分かります。



▶入野さんが当時使っていた教師用の音楽の教科書



▶墨で消される前の歌詞